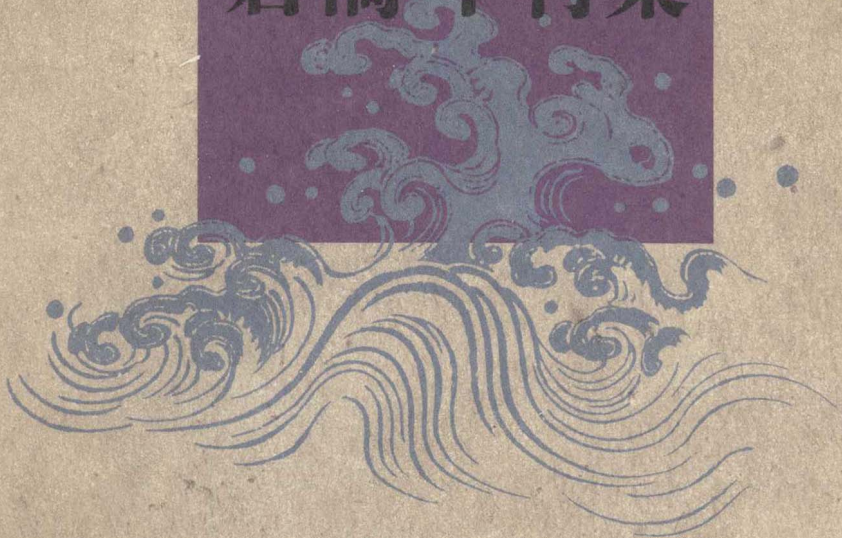


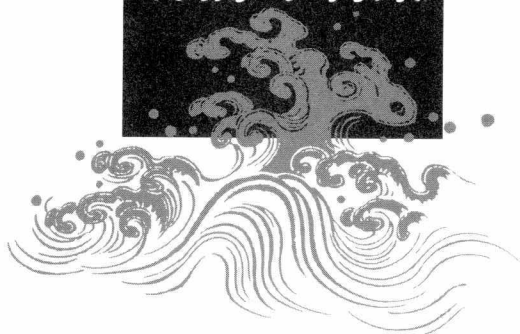
自解100句選——Ⅲ

倉橋 羊村集



自解100句選——Ⅲ

倉橋 羊村集



自解100句選 倉橋羊村集

発行——一九八七年十二月二十五日

著者——倉橋 羊村◎

発行人——川島壽美子

発行所——株式会社 牧羊社

東京都渋谷区渋谷二—十二—十二 〒150

電話 ○三(四〇〇)一六一四 振替 東京九〇二〇二

装丁者——伊藤鑛治

印刷・製本——三和印刷株式会社

定価——1100円 ISBN4-8333-0183-0

自解
100句選
倉橋羊村集

【凡例】

- ・ 掲出句は新字旧仮名を用いた。
- ・ 掲出句のルビはすべて新仮名遣いとした。
- ・ 原句にあるルビも新仮名遣いに改めた。

辰雄忌の卓に若葉の山葡萄

昭和29年作

辰雄忌は五月二十七日。この句ではじめて「馬酔木」の巻頭に推された。大学在学中のことである。初投句入選が二十七年二月号だから二年と少しである。早い方かも知れぬ。

軽井沢へは、この前後も含めてよく出かけた。室生犀星、堀辰雄の家も外から眺めたが訪れる勇氣はなかった。

犀星没後、放送作家の上野たま子さんと一緒に大森馬込の犀星邸に伺った。椿の咲く頃で朝子さんの仕事部屋にあげていただいた。

何回かお目にかかるうち、朝子さんを中心にご近所の若い奥様方をメンバーとして「古典の会」を持った。朝子さんは「彼（羊村）はその会によつて私が慰められればよい、と今から考えると、時間的に相当な無理があったにもかかわらず、熱心に話をしてくれた」（俳句・昭48）と書かれている。月一回二時間の講義だが、その会はいまもつづいて二十年目を迎えた。本年九月、昔からのメンバーで記念の慰労会をして下さった。しみじみ有難いと思った。

火^ひの山^{やま}の霧^{きり}に月^{げつ}明^{めい}みだれそむ

昭和28年作

浅間山の夜景。いま思うと「月明^{げつめい}」の語が一般的でなく、気にかかる。

師の水原秋桜子は、「これは浅間高原だろう。きれいな月夜だったところに山霧が下りてきたのだ。（中略）野に秋草が咲き、虫の鳴いていることまでわかる。それに、なんといっても火の山が背景になっているので、ことが立派になる」と、選後評に書いて下さった。このときは三位で、巻頭は「鷹啼くや火口の霧に日はしら」の千代田葛彦だった。

岩瀬善夫、八重樫弘志と三人で、清里、野辺山から小諸へ廻り、軽井沢に遊んだおりの作品で、大学二年のときである。清里はまだ草深い高原の町で、家並もまばらだった。

小海線の岩村田で日が暮れて、下車して宿屋に一泊したら五右衛門風呂に案内されておどろいた。

避暑の子に山羊の頤露けしや

も同じ旅中の作。頤^{おどろ}は下あごのことだが、制限漢字で難がある。

旅^{たび}了^おへて逢^あひたり虫^{むし}も減^へりにけり

昭和29年作

大学を出て日活株式会社に就職すると、小説やシナリオに読みふけて、よくクラシック喫茶店で原稿を書いた。地方の俳句雑誌から、原稿依頼が少しずつふえてきた。

部厚いスコア（譜面）を貸してくれる店があり、ベートーヴェン晩年のピアノソナタ作品一〇六を聞きながら、連載稿を書きついだりした。ブルッフのヴァイオリン協奏曲、シューマンのチェロ協奏曲など、店の女主人の好意に甘え、そのルートで安くレコードが買えた。ハイファイ時代のLPである。

新入社員の頃、同期の何人かと日活映画に無料で狩り出され、群衆中から走り出て主演の水島道太郎と握手する役とか、突然立ちあがって手を振るシーンとか、短い場面に出たことがある。親戚に倉橋徹という無声映画時代の俳優がいて、林長二郎の弟子で夕立勘五郎を演じたりしたので、べつに抵抗感はなかった。一年あとに石原裕次郎が入社して、小林旭、浅丘ルリ子、吉永小百合と競った。

水^み着^ぎきて身^み軽^{がる}く出^いでて孤^こ独^{どく}なり

昭和30年作

海岸風景。その頃、逗子あたりは夏のシーズン中でも、平日は閑散としていた。

日曜日、東京から繰り出してきた連中が帰る頃、まだ西日の暑い海岸に地元の若い男女が水着で出てゆく。別荘の少女たちも、砂浜を水着で散歩した。水着の身軽さは、一見明るくはなやかそうでも、ひとりでいると孤独なシルエットになる。

すでに俳句に深入りしかけていたが、正宗白鳥論とか、自伝風な小説など、書きかけては筆がすすまずに、中断した。

少年時代には、父のあとを継いで医者になるつもりだったが、旧制一高の理乙を受けて失敗してிரらい、サラリーマンに方向転換して、勤めながら文学にかかわる仕事をつづけたと思った。小説は、古今東西を問わずかなり読んできた。モームやギッシングなど、原文で苦心して読んだ。馬琴、京伝、振鷺亭の江戸文学も、読み出すと興味がそそられた。

落葉おちば降ふるひかりの中なかを妻つまとゆけり

昭和36年作

三十三年に結婚し、ほどなく横浜市戸塚の公団住宅に住んだ。付近には雑木林の丘があり、田もひろがっていた。

俳句雑誌に書く原稿がふえてきたが、机に向かわなくてよいときは、夕方から妻と近くの丘を散歩した。和服の着流しで下駄をはき、うすら寒くなるとマフラーを襟に巻いた。

晴れた日、丘の麓を歩くと、足元へかがやく落葉が舞いおちる。それを踏みつつ、まだ子供のいない若い夫婦は、将来の夢など語り合った。

妻の実家は、浅草小島町の四代つづいた問屋で、どちらもサラリーマン生活には無知で危なっかしい足どりだったが、三十七年に長男が生まれると、ようやく親としての自覚を持つようになった。べつに恒産があるわけでないで、長男には可哀そうだが、子供は一人しか育てられないと覚悟した。

一^{ひと}
つ
は
な
れ
夕^{ゆう}焼^{やけ}了^{おわ}
る
雲^{くも}
か
な
し

昭和39年作

団地でも「古典の会」を持つことになった。

はじめてまもなく、会の幹事役としてポスターを集会所に貼ったり、呼びかけて仲間をふやして下さったM夫人が急逝された。

同じ東京の上場会社へ勤めるご主人とは、毎日のように横須賀線で一緒に通勤したが、係長昇格を喜んでおられた矢先、ホームへ入る電車に巻きこまれるという痛ましい事故に遭われた。今度の「古典の会」も『更級日記』から始めた。犀星邸で使ったノートがそのまま役に立った。朝子さんは、さらさら日記とたのしげに呼んでおられたが、時間の都合がつかなくなつて日を変更したり、中止になったりした。朝子さんを囲んで始めた会だったが、やむなく会場を他の会員の家へ移し、会をつづけた。「古典の会」はこのあとまたふえて、最も多い時は横浜、茅ヶ崎を加えて四つ掛けもちをした。テキストも『紫式部日記』、『和泉式部日記』とふえてきた。これは何よりも私自身の勉強になった。

「鷹」・季語Ⅱ夕焼

栗くり 咲さ く や 月つき 夜よ 影かげ 濃こ き 湯ゆ 檜ひ 曾そ 川がわ

昭和39年作

原句の「合歡咲くや青渦はしる湯檜曾川」を「馬酔木」に投句したところ、秋桜子先生からつぎのような葉書をいただいた。

「拝啓。昨日御句稿を拝受。『合歡咲くや青渦はしる湯檜曾川』の御作、感心いたしました。小生七月号に『牡丹咲き雪代はしる湯檜曾川』という句を発表してをります。偶然に同じやうな句が出来たものと興味ふかく思つてをりますが、あまり似ているので、別の句を一つハガキにて御送りいただきたく、とりいそぎ申し上げます」

消印は六月一日で、先生の作品はまだ活字になっていないが、一足さきに印刷所に入っていた。七月号は六月十五日頃発行される。

拙句は会社の旅行で谷川温泉に行ったときの实景で、「……はしる湯檜曾川」と同じ表現になったことは知るすがなかった。ただ形としては、まぎれもなく秋桜子調になっているので、師弟とはいえ、ここまで似てしまふとはおそろしい。

「馬酔木」・季語Ⅱ栗の花

芒^{すすき}より風^{かぜ}はなれてはひかるなり

昭和39年作

この年、同人雑誌として「鷹」が創刊され、初代編集長となった。いらい七年間編集長をつとめて熊木まさのりに引継いだ。そのあと、ひら同人として五十九年まで在籍した。

同人を辞するとき、湘子さんは、「俳壇のパーティなどで会っても、やあ、と笑顔で握手できるような別れ方をしよう」といわれ、私もそれを望んだ。べつに喧嘩わかれをしたわけでない。秋桜子先生は、すでに亡くなられていた。

「鷹」をやめたあと、「馬酔木」に同人として復帰という夢のような話が持ちあがったが、これは私が現代俳句協会の顕彰部長をしていては、両協会のこれまでのいきさつもあって、実現できぬことがわかった。いつまでも心配をかける不肖の弟子というはかない。協会の所属は異なっても、先生の偉大なお仕事を顕彰することには全力を尽くしたい。

この句。芒の穂さきから風が放れる、その瞬間のひかりを表現したかった。

「鷹」・季語Ⅱ芒

枯^{かれ}からまつ夕^{ゆう}映^ええ透^すけてくるに蝶^{ちよう}

昭和39年作

創刊の年の秋、相馬遷子など発起同人も交えて軽井沢へ吟行した。落葉松の黄金色のもみじが忘れられなかった。その梢にかかった雲が夕日を浴びて、どうい光の加減なのか荘厳な金色に染まることがあった。

軽井沢には、冬のはじめにも行った。落葉松はすっかり葉をおとして、静寂そのものだった。さしかわした枝の間から、夕日がさしてくる。生きのこった蝶が、幹をはなれて、ひらひらと地に舞いおちた。

川端康成は晩年、夏は軽井沢の山荘で、小説を書き、エッセイを書いた。山荘の窓は浅間山に向いている。雑木の梢越しに浅間山が見え、文章を書きあぐむと、山の姿に目を遊ばせる。梢のさが風に揺れるが、浅間の肩にかかる雲はうごかない。山の稜線は少しもかくれず、火口の噴煙は雲と同じ色に白い。その噴煙も、右に垂れさがりながら、風になびくけはいはなかった。

「鷹」・季語Ⅱ枯木

幹みきにはや空そらよりの冷ひえ雁かりわたる

昭和39年作

高原には榆や山毛櫸ななど、丈の高い木が多い。太い幹に手をふれると、秋空の冷えがじかに伝わってくる。

都会では稀にしか見られぬ雁の列が、遙かの高空を渡ってゆく。

『紫式部日記』にも、梢のさきから秋のおとずれるけしきが、しみじみつづられている。

局はなのうちから眺めると、目の高さにある木々の梢がうすうすと色づく。空は高く澄みわたり、夏の名残りはもうそこにはない。

視線をおろすと、ひかる池と、遣水のほとりの草むらは、はや秋の色に染まっている。雑草がとりどりに色づいているのは、飽かずなつかしい。その眺めが心にしみるのは、式部が中年の年まわりだからである。若い時代は、はなやかな紅葉に目をうばわれて、地味な草々のもみじを顧みようとしてない。

文章に年齢が出てしまうのは、書く対象の選択だけでなく、文章の表情や呼吸にもうかがわれる。俳句も同じことである。

教^{きよう}会^{かい}の窓^{まど}が眼^めとなる 枯^{かれ}野^のの暮^{くれ}

昭和39年作

ひと昔前の清里などもそうだが、高原の教会は、周囲にあまり建物もなく、野の中に置かれた感じのものが多し。夕日をあびて、ステンドグラスがよくひかる。

あたかも窓そのものが光源のように、かがやいている。「眼となる」は、その感じを表現したものである。むろん高原でなくても、枯野であればよい。

目は見られるものでなく、見るもの。ほんらい作者の側にあるべきだが、作者以外にもう一つの目があって、そこから第三者的に光景がとらえられないものか、という思いもあった。もう一人の自分が、作者からはなれて、作者を見返す。そういう俳句が作れないだろうか、と考えたりした。

こういう試みは、その後もおりにふれて、何度も心がけている。成功する場合は少ないが、このさき注意して読んで下されば、いろいろ現われるはずである。

「鷹」・季語〓枯野

茂^{しげ}る木^きを巻^まききつて蔓^{つる}ゆるむなり

昭和39年作

新しい雑誌で俳句を作ろうとすれば、いろいろ意欲的な試みがしたくなる。

葉の生い茂る太幹を、巻ききつた蔓が、ほっと一息入れるごとく力をゆるめる。わざと力をぬくのでなく、ゴルフなどでは、まっすぐ当たって振りぬけた感じである。球に吸いついて運ぶような、力みのない感触である。そのフェイスの当たる手ごたえを忘れまいとするが、なかなか思うようにいかない。つぎの作句では、やはりりきんでしまって、好調がつづかぬのである。

俳句でも、力いっぱい振りまわして、こちらのからだに先にブレてしまっただけではない。とはいえ、はじめから力をぬいてしまっただけは、スイングにするどさがなくなる。

その呼吸を学ぼうとすると、坐禅のことが思いつく。正しく坐って肩の力をぬくのである。背筋をのびし、しっかり姿勢を保つ基本は、つねに必要なものである。自然体でありながら、形がきまらねばならない。

「鷹」・季語＝茂る